# 袋井市総合教育会議録（要旨）

| | |
|---|---|
| 会　議　名 | 平成29年度第２回袋井市総合教育会議 |
| 開 催 日 時 | 平成29年10月27日（金）午前10時00分 |
| 会 議 時 間 | 午前10時00分から正午まで（２時間０分） |
| 場　　所 | 袋井市役所　４階　庁議室 |
| 出　席　者 | 原田 英之　袋井市長<br>鈴木 典夫　教育長<br>前嶋 康枝　教育長職務代理者<br>上原 富夫　教育委員<br>豊田 君子　教育委員<br>大谷 純應　教育委員　（計：６人） |
| 欠　席　者 | 無し |
| 傍　聴　者 | 無し |
| 当局出席者 | 大河原 幸夫　教育部長<br>早川 俊之　教育企画課長<br>伊藤 千ひろ　教育企画課総務企画係長<br>平野 邦孝　学校教育課長<br>乗松 里好　すこやか子ども課長<br>（合計：11人） |
| 会議に付した事案 | 別紙次第のとおり |

# 平成29年度　第２回袋井市総合教育会議　次第

日時：平成29年10月27日（金）午前10時
場所：袋井市役所４階　庁議室

１　開　会

２　市長あいさつ

３　議　事

本市で子育てしてよかった、定住してよかった、と思ってもらうために

（１）　本市の児童生徒の特性、課題を把握し、学力向上対策について協議する

ア　平成29年度学力・学習状況調査及び児童生徒のアンケートの結果分析

イ　平成28年度生と平成29年度生との比較分析

ウ　袋井版学力調査結果からみえる本市義務教育の特性、課題

エ　学力向上対策としての幼小中一貫教育

- 平成32年度完全実施までの小中一貫教育のスケジュール
- 幼小中一貫教育の評価指標案
- 先進地（埼玉県草加市）視察から学ぶ本市の幼小接続の方向性

４　その他

５　閉　会

# 平成29年度第２回袋井市総合教育会議 会議録（要旨）

## 1　開会

●教育部長

定刻となりましたので、本年度第２回の袋井市総合教育会議を開催させていただきます。まず、会に先立ちまして、会議録署名お二人につきまして、規則により議長が指名することとなっておりますが、事務局からの提案とさせていただきたいと思います。上原委員と大谷委員にお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

それでは、原田市長から御挨拶をお願いいたします。

## 2　市長あいさつ

●市長

おはようございます。総合教育会議に出席いただきありがとうございます。可能な限り、出席している皆様から意見をいただきたいと考えています。事務局からの説明も可能な限り簡潔に、ポイントを言ってください。よろしくお願いします。

●教育部長

本日の会議の内容は、次第に記載されたとおりでございます。ここからは、議長である市長に進行をお願いいたします。

## 3　議事

（１）本市の児童生徒の特性、課題を把握し、学力向上対策について協議する

●市長

それでは議論するテーマに入ってまいります。（１）本市の児童生徒の特性、課題を把握し、学力向上対策について協議するということですが、内容はお手元の次第の、アからエまでの４つに分けて協議をします。終了時間を12時少し前と考えておりますので、皆様の御協力をお願いいたします。それでは、１つ目の、「ア　平成29年度学力・学習状況調査及び児童生徒のアンケートの結果分析」について、事務局から説明をお願いします。

●教育部長

それでは私から、本日の会議の概要について説明いたします。本日の会議のテーマにつきましては、前回８月の会議に引き続きまして、本市の子育て支援に関することに焦点を当てて、その中で特に、市の課題となっている子どもたちの学力レベルをどのように高めていくかということについて御意見をいただく予定です。本年４月に実施した全国学力・学習状況調査の結果を見ると、一つの項目を除いて、７つの項目すべて全国平均を下回っているという結果、これは深刻な状況ととらえております。本日は、全国学力・学習状況調査の結果と、同じ日に実施されました児童生徒のアンケート調査、この

結果を基に、本市の児童生徒の特性を分析したうえで、学力向上のための課題をお示しして、今後の学力の向上、さらには基礎学力の定着に向けた具体的な方策等について、意見交換をお願いしたいと思います。それでは、学校教育課長から全国学調の結果分析と対応策について説明いたします。

●学校教育課長

本年度の全国学力・学習状況調査の、学力に関する状況について説明申し上げます。本年度は、残念ながら、一つの教科を除いて全ての教科において全国平均を下回りました。そこで、どんなところが弱いかということについて少し説明いたしますと、お手元の資料１－２の33ページをご覧ください。これは、活用に関する国語Ｂの問題です。実はここに、29ページから33ページまでで問題は３問しかありません。時間的に全体で40分の間にこの３問を解くには、12分から13分程度で回答しないと最後までたどり着けないということになります。文章を読んで、問題を読み、あちらをめくり、こちらをめくりしながら、その間に思考がどれだけ働くかというとなかなか難しいところです。従って、問題文を読むときに、何を聞いているのかきちんと把握しないと回答までたどり着けない。特に29ページにあるように、回答欄に理由を説明しなさいというような問題においては、３つの条件をクリアしないと正解にならない。そうすると子どもたちは、何をここで書かなければいけないのか、きちんと論点を整理したうえで書かなければいけない。本市の子どもたちは、ここの部分が非常に弱いということが分かりました。今後、読むこと、書くことに力を入れなければならないという課題が浮き彫りになったということです。算数についても同じで、一つの事柄、知識を知っているだけでは解けない。知識と知識を組み合わせて、さらに発展させて考えるということが小学校でも要求されている内容です。ただ単純な知識だけで解けるという問題ではないということです。それから、小学校４、５年生の問題においては、資料１－２の２ページにありますが、書くこと、数量関係。数量関係とは比例反比例などで、一つのものが動くと他のものも動くという、二つのものが同時に動く問題で、これに戸惑いを感じている児童が多いです。中学校でも同じような傾向が見られます。生活状況調査については、本市の課題としては、メディアの視聴時間が非常に長いということが課題です。テレビ、ゲーム、ＳＮＳ、ＬＩＮＥの使用時間が、年々長くなっています。前年度との比較では、平成24年からデータをとっておりますが、平成24年から見ていくと、全国を１００と見たときに、年々全国との差は縮まってきているという傾向があります。当初は全国１００に対して、本市は９１くらいでしたが、徐々に上がってきて、本年度は９７と、あと少し、全国との差があるという状況です。今後力を入れていかなければならない、特に思考を、ということで、今後話題となるであろう思考スキル・思考ツールといった、考え方のノウハウを子どもたちに理解させる中で、本市の思考力を向上させる必要があると考えます。次に、資料１－２の11ページをご覧ください。新学習指導要領で求められている３つの力は、何ができるようになるか、何を学ぶか、どのように学ぶかです。今までは、何が分かったか、何を理解したか、というような知識偏重型のようなものが多かったのですが、これからの世の中は、非常に複雑になってきます。なかなか自分の力だけでは解くことができないものに出会います。そこで、人との会話を大切にし、説明する力をつけて、問題を解決するという、教科横断的な力が必要になります。これが実は、総合的な学習の学びということですが、これが重要になってきます。本市の子どもたちは、説明する

力が非常に苦手であるという結果がでています。自分が理路整然に説明できるかというと、その割合も非常に低い、そういう説明を苦手とする子どもたちが多いです。そこで、これからの思考というところにつながっていくということで、これからの課題としては、思考力を育成していくということです。また、復習するとよいということが結果として出ています。

●教育部長

今話のあった、復習の時間。学校現場だけではなくて、そうしたことにどのように時間を確保できるのかということについて、事務局としては、例えば放課後児童クラブでの時間をどのように活用できるのか、そういったことも大きな課題の一つと認識しております。そこで、放課後児童クラブの内容を簡単に説明いたします。それから御協議のほうをお願いいたします。

●すこやか子ども課長

それでは私から、放課後児童クラブの概要について、資料２について御説明申し上げます。市議会の一般質問等でも、学力向上に向けて、放課後児童クラブの活用などについて質問されているような状況です。現在の放課後児童クラブは、基本的に、昼間保護者がいない家庭のかわりに子どもたちをお預かりする児童福祉施設ということで、この観点から運営させていただいております。市内には17のクラブがあります。平成31年４月に、全校全クラブで全学年の希望者を受け入れる予定です。運営体制は各小学校区育成会やＮＰＯ法人などが行っています。

●市長

何か御質問、御意見などありましたらお願いします。

●大谷委員

その年の調査の母集団となる子どもたちの出来不出来もあるとは思いますが、なかなか家庭にいて、子どもにゲームやテレビを見ないように言っても聞かないと思います。家庭でどの程度子どもたちに勉強させているのかが重要だと思います。学習塾も、家で勉強するのが難しいから、塾に行かせて勉強するように仕向けているところもあると思います。放課後児童クラブについては、笠原こども園に先日伺って、笠原はこども園の中に放課後児童クラブがあってよいと思いました。放課後児童クラブが学校に隣接している場合は、学校の図書室の利用はできるのでしょうか。読み聞かせでなくて、子どもたちが好きな本を読める環境があればいいなと思います。文章力や語彙力は読書の量によって違ってくると思います。

●市長

人は、ある程度環境を整えないとなかなかできないという話は真実だと思います。以前、家庭で勉強する時間のデータがあったと思いましたが、どうですか。

●学校教育課長

本年度、本市の６年生で、学校の授業とは別に平日２時間以上学習している児童は１９．２％です。全国は２７％です。塾での勉強時間もこれに入っています。

●大谷委員

親がよくテレビを見れば子どもも見るし、親がゲームをしていれば、子どももゲームをすると思います。子どもだけに勉強しなさいというのは難しい、家庭の環境は大きいと思います。この結果は、どの程度保護者に伝えているのでしょうか。しっかり保護者

にどう伝えていくかというのがすごく重要だと思います。学校関係者だけの力では学力向上は難しいと思います。学校教育と家庭教育の両輪がそろって、基礎学力の向上につながると思います。全ての家庭にこの事実を深刻に受け止めていただく機会を設けて、親に気付いてもらう必要があると思います。

●上原委員

学力を定着させる、向上していくというのは、現在の学校教育、学校における教師から教えていただく、学校で活動するというほかに、当然、家庭教育という分野、また、社会全体から学ぶ事柄などがあって、そのようなことが一緒になって本来の生きる力や能力に結び付いていくということですが、私は大谷委員の話に賛成で、場所を確保して、環境を整えてあげれば、強制でなくてもそこに導入していくような手掛かりになると思います。学校で勉強し、もう少し頑張ってみようという子をたくさん作るためには、放課後児童クラブの上手な活用や、資金力があり余裕がある家庭では塾に通うこともあると思います。基本的に放課後児童クラブは、遊びを中心として安全に楽しく、親のいない時間に健全な過ごし方をさせようというのが目的ですが、放課後児童クラブのスタンスをもっと広く考えて、放課後児童クラブもある程度勉強する場所だと定義づけてもいいのかもしれません。ただ、笠原こども園の中のクラブを見て思いましたが、安心安全でとても感じが良い場所ですが、一生懸命に勉強する環境ではないと思いました。机があって、椅子があって、照明器具があって、そういう設備を整えるのも一つの方法だと思います。勉強を頑張りたい子どもにチャンスや環境を与えるために、遊びの場、おやつを食べる場、勉強の場は別々にあったほうがいいと思います。

●豊田委員

昨日、学調の問題を実際にひとつやってみて、その後、問題の解き方などの解説を学校教育課長から伺いました。その話を聞いていて、学校では点数を取るための技術を教えているんだなと思うと同時に、学力をつけるためなのか、点数を取るためなのか考えさせられました。今の子どもたちは安全な公園の中で遊んでいます。昔は何もない中で、あるものの中で自分たちで遊びを見つけていました。今の子どもたちは、ある程度環境を与えてあげないとやっていけないのかなと思います。自分の子どもやその友達が家で宿題をやっていましたが、終わるのが早い子、遅い子がいます。学習時間云々というよりは、学習した内容なのかなと思いました。それから、先ほどの放課後児童クラブの図書館の利用についても、月１回でもいいので利用できたら、読書の環境の一つになると思いました。自分の経験や皆さんのお話から、やはり子どもには環境を整えることが大切だと感じました。

●前嶋委員

これまで学力の話をする中で、学校の話はするけれども、家庭教育についてこれだけ話をすることはなかったと思います。いま、立ち上がる時かなと感じました。学習できる環境を整えるということを進めるときに、やはり、自分で何かをしたいという気持ちを育てることが一番だと思います。以前上原委員の会社の話で、自分から進んで仕事をする、そして、他の人に教えることができる、という話を伺ったことがありますが、まさにこれだと思います。学習の中でも、家庭の中でも、地域とのかかわりの中でも、笠原こども園のように大きい子が小さい子に自ら進んで教える、教えてあげるという場を設ける、そうすることで考える力が育つし、人間関係もできると思います。ただ、一緒

にいるのではなくて、何のために一緒に遊ぶのかということを考えて、遊びの中に異年齢の交流を持つことで何かが生まれていく。考えさせる場というのは、学習の場でも遊びの場でもできると思います。だから、異年齢の関わり、地域とのかかわりは大切にしていかなければならないと思いました。ただやらせるというのではなくて、考えながらやれる時間を作っていくことが大事だなと改めて感じました。次のステップに移るためには、防災訓練にしても、参加すればいいのではなくて、何を考えさせる場とするのか、放課後児童クラブにしても、目的を多面的に考えてみるいいチャンスかなと思いました。先ほどの環境を整える学習できる場という話ですが、放課後帰る前に勉強する時間を30分でも与えて、それから帰るという学校があって、それは地域のボランティアが見守っているのですが、それは授業ではないから、教え合いということもできるのかなと思います。

●鈴木教育長

前嶋委員のおっしゃるように、家庭学習、家庭の責任というのはあまり議論していませんでした。若干、課長の話を補足すると、袋井の子どもはテレビやゲームをする時間が長い、当然学習時間が短い、２時間以上学習する子どもが全国では２７％、袋井が２０％。実は塾を含むというのがポイントで、袋井の通塾率は全国に比べて低いです。ですから、大谷委員がおっしゃったとおり、今子どもたちは、塾で学力を上げるというよりは、最低限勉強する場所として塾を利用している。それが、袋井の通塾率が低ければ当然全体として学習時間は少なくなるというのが、統計から見えることです。これは各家庭の子ども部屋に、テレビ・パソコン・ゲーム機が入った時から言っていることですが、今の子どもは、レストランの中で減量させられているボクサーのようなものです。誘惑が多い中にいてだめだといわれる。私は子どもたちに同情している部分もあります。そこで、私が高校生の子どもたちに言ってきたことは、家の中からテレビ・ゲームを排除するか、夏休みのは学校に来よう、空き教室や図書室に来ようと言っていました。しっかりした高校生は予備校の自習室で勉強していたようです。勉強しなければならないと自覚を持っている子どもたちは、自分で勉強する環境を作っています。雑踏の中のような月見の里学遊館でもメロープラザでも、家では勉強できないからそこで勉強している。そうやって工夫できる子どもたちはいいんです。問題は、それ以外の子どもたちの方が圧倒的に多いので、その子たちにどうやって学習に向かう時間を確保するかということです。もう１点、放課後児童クラブですが、学習の場としては魅力的で、あれだけの子どもたちが２時間、長い子は４時間もいるわけですから、そこをと思ってはいるのですが、あの施設のコンセプトは「家庭と同じ環境で」ということで、本当は学校内に作ってはいけないのですが、学校が終わって、学校でないところでほっとする場として設計されています。畳とか、割と家庭的な環境を整備するというところに主眼がおかれています。ですから、そこに教室と同じ机とか椅子を置くというのはちょっと違うんですね。ただ、昨日訪問した笠原こども園の中の放課後児童クラブで、畳の上に長机を置いて宿題をやっている子がいました。やっている子はやっているんだな、あの時間を大切にしたいな、という気持ちは確かに持ちました。しかし、あそこが毎日学習室になった時に、子どもたちにとってどういう場所になるのかなと考えました。もう一点、前嶋委員がおっしゃった、袋井でいくつかの小学校で行っているのは、放課後子どもたちを残して、30分程度地域の方々が宿題の面倒を見てくれるというのが広がりつつあります。

実は私が本当にお願いしたいと思っているのは１年生から３年生までで、スタートが遅れるとすべてが遅れてしまうからです。ところが、帰りが遅くなってしまうことや、全員残すので特に大規模校では先生方も大変になってしまうので、なかなか難しい。できない話ばかりですが、皆さんが話していただいた内容は大事なところだと思います。それを、どういうふうに考えていくかということの議論を深めていただけるとありがたいと思っています。

●市長

まず、袋井市らしい子どもについての議論はいったん置いておきましょう。心身健康で親孝行で地域のために活動できるとか、そういう話を始めると違う議論に展開しますので、今回は、学力を上げていくことに話題をフォーカスしながら進めていきましょう。一点目で、袋井市の学校のレベルが全国に比べて低いです、袋井の子どもたちが全国に比べて勉強時間が少ないです、ということは、私たち市民や保護者がどこまで知っていますか。学力試験の結果がホームページに載っているということですが、ホームページにアクセスする人ばかりではないと思います。ショッキング療法ではないですが、私たちの現状を知らせて、これをこうするために市としてこうしたいですというやり方で、家庭を巻き込んで、市民を巻き込んでいった方がいいのかなという感じがします。その結果、経費もかかる、学校の先生にもプレッシャーがかかるかもしれませんが、今年は１勝７敗ということで、経年的に袋井市の特質が、今年だけたまさか悪いのか、もともと悪いのか、どうですか。私は率直に言って、そんなに学力が高くないと思っています。高くないその原因がここにあると考えますよと、まず明らかにする。おそらくそれを出すと、教育長や私のところにいろいろなところから必ず来ます。袋井で育つと幼稚なんです。よく言えばおおらか、悪く言えば幼稚、私も袋井市で育ったからそうでした。だから、そういうことをまず市民の皆さんに知らせて、その上に立って、行政ではこうします、家庭ではこうしましょうと、そういうことを考えてみませんか。そこに、放課後児童クラブのあり方の問題とか、図書館のあり方、学校の図書室のあり方とか、環境を変えていきましょうということをやっていいと思います。一気にやるのは難しいと思うので、３年かけてもいいと思っています。こういうことを目指してやりましょうと。ひとつ心配するのは、学力試験の点数だけが教育のアウトプットとしてふさわしいかどうかという点ですが、他に比べるものがないのであれば仕方ないと思います。きちんと我々も市民も認識して、その上でこうしましょうという方法については、一応やれることはやっているんですね、ホームページで。しかし、ホームページでやるのと広報ふくろいでやるのとでは迫力が違うと思います。どうですか。

●大谷委員

実際には、現在全国平均よりも若干下回っているとはいうものの、年々全国平均に近づいてきているということは、ある程度市の教育施策の成果が実っていると思います。現在全国平均よりも低いというところだけを端的にクローズアップするのではなく、そのような成果を伝えたほうがいいと思います。「子育てするなら袋井市」と言っているのに、これでは子育てに向いてないんじゃないかという話になってしまいますから。そういう成果がある中で、もうひとつ、全国平均の壁を超えるというところで、学校でも新学習指導要領に対応していろいろな工夫をしていますということと同時に、家庭においても地域においても、子育てが、本市のいろいろなものの原点になるということを考え

ると、子どもたちにしっかり勉強させる環境を整えることについて、みんなで頑張ろうという話にもっていった方がいいと思います。

●市長

今までの過程で努力した結果が出てきているということは、それはそれでいいと思います。現場でも、英語教育やＩＣＴをやっていますから。けれども、極端なことを言ったら、今年の結果をオープンにしてみんなでこれを考えてみましょうというのは、市民にとっては相当ショッキングな話ですが、隠す必要はないと思います。代案を持たずに困っているだけではだめですが、だからこうしますというのは、私は覚悟をして言ってもいいのかなと思います。

●学校教育課長

データの追加をいたします。先ほどから家庭の学習、それから図書館の話がありましたので、本年度の小学校６年生の状況をお伝えします。実は小学校も中学校も同じ傾向がありますが、３時間以上勉強している子は、１日30分以下の子と、学習の定着度がだいたい同じくらいです。要するに、長くやればいいということではなく、集中して１時間半から２時間きちんとやっている子のほうが、実は成績がいいという結果です。

●市長

それは、成績と勉強時間との関係性ですね。小学校６年生の。

●学校教育課長

中学校３年生でも、同じ結果が出ています。それから、図書館についてですが、学校の図書室や地域の図書館に週に１回から３回、ほぼ毎日通っている子どもは９．５％、年間に全く行かないという子どもは３３％、年に数回利用している子どもが３４％なので、図書館をほとんど利用していないという子どもは３分の２です。続いて読書ですが、毎日30分以下、または全くしないという子どもは６６％という結果が出ています。先ほど、読むことは大切という話、環境を整えてはどうかという話が出ましたが、なかなか図書館の利用が少ないというのが現状です。

●教育長

先ほど市長のお話の中で、学力向上のアウトプットとして学調の成績だけでは、という話がありましたが、英語の最近の使い回しで、インプット、アウトプット、アウトカムという言い方があります。最終的にアウトカムってどういう状態にしたいのかということですが、確かに学力向上にいろいろな対策をしてインプットして、アウトプットは学力が上がること。これは当然そうでなければならないと思います。アウトカムとして今教育委員会が小中一貫教育で、夢を抱き、次の一歩を踏み出す15歳というのは、学力向上の結果、進路選択の幅が広がる、これがアウトカムだと理解したテーマです。学力向上の対策をする、学力が上がる、その結果として進路希望が叶えられる、それをアウトカムとして、アウトプットのもう一つ先の大きな目標と考えています。その目標はそれぞれ子どもによって違いますが、そういう点で学力向上をとらえていただけるとありがたいと思っています。

●市長

ちょうど来年度予算の時期ですが、このテーマはとても予算のかけがいのあるテーマだと思っています。多分袋井は、隣接する磐田市や掛川市よりも歴史的に学力が低いと思います。率直に言って。私が子どものころからそういう認識でいました。しかし、袋

井の子どもは質実剛健で、けんかも強いしいいんだよということだったように思います。しかし、今はけんかが強ければいいという時代ではなくて、学力も全国と同じくらいあって、その上質実剛健で、というのがいい。それには、勉強する環境を作る、放課後児童クラブはそもそも違うよね、だけど、あの中で一定の時間、場所で勉強しやすい時間を作るとか、図書館を利用しやすい環境を作るとか、家庭でもテレビやゲームを削る努力をアナウンスするとか、いろいろな角度を変えながら家庭に対して、一方的な言い方ではなくて、いろんな言い方で少し考えてみてはどうですか、教育委員会として。それについて市長部局は協力しますから。どういうデータを組み合わせて保護者や市民に出していくことが一番説得力があって、保護者のマインドを変えていくのか。

●大谷委員

先ほどの課長の話で、確かに長い時間勉強すればいいというものではなくて、メリハリをつけて１時間でもきっちり勉強して、空いた時間を使いたいことに使うという方がいいですね。メリハリがつくということは、自主的に学習することができるということだと思います。これは幼稚園の頃からメリハリのついた生活ができるかどうか、みんなで一緒にやるときはやりましょう、遊ぶときは遊びましょうということにつながると思います。メリハリ、節があるという部分では、中学校の部活動もそれに近いと思います。学力だけでなく、いろいろな成功体験が地域や社会の中にあると思うので、親もアンテナを高くしているといいと思います。先日も、ラジオＣＭコンテストというのがあって、全国で６千通くらい応募があって、20秒のラジオＣＭのシナリオを考えるものですが、例えばそういうものに応募するとか、いろいろなところに成功する体験があるかもしれない。親はただ勉強させればいいのでなくて、地域や社会、いろいろなところで学ばせる、それが袋井らしい子どものような気がします。勉強するばかりがいいわけではないが、それでも勉強は集中してやりましょうということをうまく伝えたいと思ったのですが。

●教育長

資料１－２の20ページクロス集計を御覧ください。これは先ほど課長が説明したものの一部で、この表はテレビゲームをどのくらいするかという質問です。これで見ると、４時間以上テレビゲームをやっている子は正答率が一番低いです。しかし、テレビゲームを全くしない子どもよりは、１時間以内ゲームをやっている子のほうが成績がいいんです。つまりこれは、自分でテレビゲームの電源を切れる子ども、これが一番成績がいいのではないかという仮説がここで成り立つわけです。次に22ページの表は、１日どのくらい勉強するかという質問ですが、３時間以上やっている子よりも、２時間以上３時間以内の子のほうが成績がいい。そして、23ページの表を見ると、家で予習をしているかという質問ですが、やはり予習をちゃんとやっている子のほうが成績がいい。特に顕著なのが24ページの表で、家で復習をやっているかという質問に、ちゃんと復習をしている子と復習をしない子では正答率に１０％も差があります。特に中学生になると明らかに差が出ます。先ほどからお話をいただいている学習環境で、どういうふうに子どもたちに学んだことを定着させていくかという時に、いろいろなヒントがあって、市長がおっしゃったように、市民に何を見せていけば理解を求められるのかということですが、これを見せたとして市民はどうとらえるでしょうか。たかが１０％なのか、されど１０％なのか。私たちも現状を理解してほしいと思っていますが、学習環境について意識の

低い御家庭の子どもたちに、もう少し勉強に目を向けさせるにはどうしたらいいのか、悩んでいるところです。

●市長

放課後児童クラブも、今のままで変えてほしいといってもなかなか変えられないでしょうね。指導員にしろ、環境にしろ、今は安全に預かることを優先しているから。でも、うまく使おうとすると指導員スタッフを含めて、環境も整えて、変えていかないといけないと思います。私は、放課後児童クラブ自体はなくならないと思います。少なくとも共稼ぎの家庭は増えていくと思うし、その数は高値安定というか、多いままだと思います。そうなると、放課後児童クラブは、当初作った時とだんだん変質していく、変質すべきだと思います。放課後児童クラブの充実の面が、例えば、ある程度復習ができるという環境を持った充実とかそういうことをやっていく必要もあると思うし、公立図書館も子どもが勉強に来ているか高齢者が読書しているのが多いと思います。

●上原委員

夏休みは子どもたちが図書館に来て勉強していますね。

●市長

家で勉強するよりも公立図書館のほうが勉強しやすいのであれば、そういう環境を作るべきだと思います。例えば、浅羽地域で支所を含めて少し場所が空く可能性があるので、そういう場所をうまく使ってみるとか、学習館ではないが、そういう利用方法も考える時期に来ているのかなと思います。スマホもゲームも、２時間を１時間にしてよと、これは100回言ったって聞かない子は聞かないと思います。大人のたばこと同じです。健康に悪いことを承知でも吸っている。スマホは健康に悪くないわけだし、もっと大変ですよ。そう思うと、私は、来年度の当初をめがけて、市民にきちんと話をして、その代わり私たちはこういうことをやるから、是非皆さんの御家庭でもその気になってくださいとスタートして、これはおそらくすぐできないから３年間くらいかけて、そういう目的を達成する道ができないかなと、これは私は、学力試験の結果を見たときにそういう気持ちですね。大谷委員のように、年々全国に近づいているから努力の成果が出ていると言ってくれるのはたいへんうれしいサポートですが、袋井独自でやってもいいのかなと思います。だから学校教育の中身を充実させる必要がないということではなく、ＩＣＴを使ったり英語教育を進めることは、それはそれで必要だと思っています。少なくとも家庭教育とか、学習する環境を整えるということについて、来年までに検討して、それを何年間計画で環境を整えることを成し遂げるようなロードマップを作るように、是非教育委員会にそれをお願いしたいです。必ずお金はかかると思います。適切な人がいるかどうかもわかりませんが。

●上原委員

必ず、家庭教育の重要性と家庭教育という言葉はついて回るものですが、先ほどから市長が言われたように、保護者やおうちの人に若干ショッキングであっても、刺激とプレッシャーを与えるというのは一つの方法かもしれません。全国の学調で毎回上位の市町があると思いますが、そこと本市との違いを認識できるようなデータや情報は必要だと思います。どんなことをやって学力の増進、定着を図っているのか、何がなされているのか、研究する必要があると思います。あわせて、教育委員会で現在進めている幼小中一貫教育の中で新しいカリキュラムを作って、未来に能力を発揮できる子どもをより

多くつくろうという試み、これにあわせて、家庭教育が大事だと何回言っても変わらないので、例えば図書館を活用して子どもたちの学習環境を充実させる、放課後児童クラブに関しても、こういうことをやっている子どもがいるよと親から子どもに伝えられる、友達と遊び、宿題もできる、ということを認識させることです。そういうことを含めた中で、親たちに、家庭で２時間も３時間も勉強しなくていいですよ、その代わり、どんな勉強の仕方があるのか、家庭学習のノウハウをプレゼンしてあげるといいと思います。場合によっては新しい教育課程と同じように、家庭学習の新カリキュラムのようなものが、３年後くらいまでに形としてできれば、親たちの理解度も深まると思います。もう１つ重要なのは、３年後には学調の平均点より３％上を目指すなどの具体的な目標値が必要なのかもしれません。家庭教育の中で、親たちの認識を呼び起こすためには、まだほかにもあるような気がします。

●前嶋委員

これまで幼小中一貫教育で、魅力ある学校ということで進めてきたことによって、成果が上がってきています。学校が楽しい、好きな教科があるなど、そのような人間関係の中で、子どもたちが学校生活に満足しているというのが実情に現れてきています。ある団体が中学校に講師として訪問した際にも、子どもたちの聞く姿勢がとてもよかったという声を聴き、とてもうれしい思いをしました。学校がそのように頑張っている一方、家庭教育の中では、自分でスマホの電源が切れるとか、自分からできるという子どもを育てていくということがこれからは大事なことだと思います。自分で考えてできる、ということが幼小中の中でだんだん育っていくことが、一番のこれからの生きていく力になるのかなと思いました。生徒への質問の中で、今読んでいる本があるかという質問がありましたが、「本を10冊読みなさい」と言うよりも、この質問からあぁ本を読まなきゃと思うのと同じように、ステップアップできるような、最初は言われてやっていたかもしれないが、そのうち自らやるようになるような、学校ではできない家庭でしかできないようなことを重点的に項目として挙げてみてはどうでしょうか。そのために、浅羽支所や公民館が開かれたらどうかとか、いろいろな方法が生まれると思いました。いま、教育委員会が進めている学校教育と、市民ががんばれる家庭教育をあわせていくことによって、考える子どもたちが育つ、そんなことを思いました。

●市長

時間も限られておりますので、幼小中一貫教育の話に移ります。

●教育企画課長

それでは、幼小中一貫教育について御説明いたします。まず資料４を御覧ください。幼小中一貫教育完全実施に向けたスケジュールですが、標準カリキュラムの作成については、学習指導要領をベースに全ての教科に思考ツールを活用して、系統的に整理した小中学校９年間を通した一貫カリキュラムの作成に取り組んでいます。思考ツールとは、御存知のとおり、意見を整理する際に、手順やイメージを図式化して、考える助けをするものです。９年間思考ツールを活用した学習をすることによって、論理的な思考力、判断力、表現力を養成することを狙いとしています。本市の標準カリキュラムには、この９年間を通した思考ツールの活用を組み込んでまいります。標準カリキュラム作成スケジュールですが、資料４にある教科等について本年度作成をし、各中学校区において各校のカリキュラムに反映して次年度からできるものから試行をしていく予定です。本

格実施については、英語は平成31年度から全ての小学校で本格実施をし、他の教科等については、平成31年度に新学習指導要領への対応も含めた見直しをして、平成32年度から本格実施をする予定でいます。次に資料５を御覧ください。本市の幼小中一貫教育の評価指標案ですが、現段階で幼小中一貫教育の成果を図る指標として考えているものです。評価指標の案については、一番上に目的がありますが、自立力、社会力を備えた、夢を抱きたくましく次の一歩を踏み出す15歳の育成のために、３つの目標を立てています。この３つの目標に対して、課題となる項目ごとに数値化する内容となっています。一番右の欄にありますが、現在調査しているものを中心として考えています。この指標にはまだ目標値が入っていません。今後さらに検討をして、今後、有識者や市民を含めた幼小中一貫教育推進委員会の中で指標としての適否、目標値について協議をして定めていく予定です。本日は、このような指標でよいか、他に適切な指標がないかなどのお話しをいただけたらと思います。それから資料６ですが、こちらは10月５日に教育委員視察研修ということで、埼玉県草加市に幼小接続の視察に行った内容をまとめたものです。草加市では、幼保小接続プログラム、小中連携プログラム、標準カリキュラムを作成しており、０歳から15歳までの一貫教育をしております。保育園、幼稚園、小学校が連携した保育教育を実施しており、具体的には、０歳から15歳までを系統立てて、幼保小中の教員が同じ方向を見て交流などの連携を実施していました。資料に、視察から学ぶ本市の幼小接続の方向性を記載しましたが、草加市のアンケート調査では学力の向上については現在今一つの結果であるということで、本市の幼小中一貫教育については、幼小接続カリキュラムや標準カリキュラムの系統性を持たせて、思考ツールの活用により、考える力につながる内容を重視して、学びに向かう力と学力向上を図ってまいります。

●市長

そうすると、いまからの議論としては、９ページの内容などについてですか。

●教育企画課長

はい、９ページの評価指標案などについての御意見をいただければと思います。

●大谷委員

先日草加市に行って感じたことは、幼小相互の交流は成功しているが、学力向上には成果が出ていなかった。学習に対する姿勢の向上が見えてこなかった。幼保小中という中でどの部分に対して目標をおいているのか。本市では、最終的には、15歳の時に進路の選択肢が広がるということで、ある程度の基礎学力もついていて、自分が進学したい高校に行けるかということと、もう一つは、自分で目標設定できるような、自主性をもって子どもが成長しているかどうかということだと思います。この評価指標については、ただ、幼保小中によってなだらかになったとか、交流がうまくいくとか、そういうことに終始してしまわないようにしなければいけないと、草加市の視察から痛感しました。

●上原委員

資料５の評価指標案を見たときに、何を聞きたいのかわからない質問が多いという印象です。例えば、授業に主体的に取り組んでいるという質問については、主体的とはどういうことを意図しているのか。例えば、学校が楽しいと思うという質問は、どういう時に学校が楽しいと思うのか、もう少し具体性のある２次質問を設けたほうが教育の課題発見につながるような気がします。単純に学校が楽しいかどうか聞いても、何の解決

にもならないと思います。アンケートの作り方は難しいですが、具体的なポイントを発見するような質問をセットする必要があるのかなと思います。授業が全く分からないと答えた子どもがいたとして、どこが分からないのか聞いたほうがいい。子ども自身が、自分はなんでわからないのかと気づかせるためにも、詳細な部分までこたえられるようなアンケートがあったほうがいいと思います。

●豊田委員

15歳までのイメージがつきづらいというか、いろいろやっていることが点と点でつながらない、イメージがしにくいと感じます。草加市に行って私が感じたのは、分かりやすかった。例えば、幼稚園の子どもが虫を捕る、虫を知ることで、小学生の理科、中学校の生物につながる。そういうイメージができました。

●前嶋委員

15歳に選択肢があるということを、中学３年生がどれだけ意識することができているか、あるいは意識させているか。本市でやっているとことをいかに子どもたちが実感できるかということに結び付くようなものでなければならないと、改めて思いました。

●市長

９ページの表は、幼小中一貫教育を評価するのに、このメジャーで評価しますよということですよね。幼小中一貫教育で学力向上ができたかどうか、思考力向上はできたかどうか、不登校はなくなりましたかとか、点数でもって判断しますよということですよね。教育課題を解決するためには、学力向上と、いじめ・不登校・問題行動の減少と、自己有用感であり、これから求められる資質能力は、思考力と、英語教育と、ＩＣＴ活用で、オール袋井による子育て体制の充実も目標にして、こういうところからスタートしているわけですよね。この項目について、これはこのほうがいいとかそういう意見を求めているんですよね。そこで、上原委員からは、これでだけではわかりにくいので、もう少し具体的な質問をしたらどうかという意見がでました。この、教育課題を解決するために必要なことは左側にある５つの項目で、これからの時代に求められる資質・能力の育成に必要なことは左側の４つの項目でということは、既に教育委員会の中で十分に議論されている内容ですか。

●教育企画課

この項目は、小中一貫教育の基本方針の中で、「夢を抱き、たくましく次の一歩を踏み出す15歳」の育成を目的として、３つの目標を定めており、その目標に対してどのような成果があったかという項目だてをしたものです。

●教育長

小中一貫教育基本方針にうたわれた項目を拾うと、こういうことになるということです。

●大谷委員

調査対象というのが、例えば、教職員の意識調査というと先生方の主観の部分で答えているので、判断が難しいと思います。ＩＣＴの活用とか、先生方がどういうレベルでとらえているのか、先生によって格差があるような気がします。ただ機械として授業に取り入れていればいいのか、効果的に変わっているかとか、その違いは非常にあると思います。ただ行ったとか、校務にＩＣＴを活用できるとか、主観に関わってくるものなので、そうではなくて、もっと具体的に、それによって何が変わっていくのかというこ

と、どういう効果が得られるかというところまで探っていかないと、本当のＩＣＴの活用、利用や使用ではなく活用、ということにはならないと思います。それから、考える力を高めることを意識した授業の実践というところで、おそらく最終的に求められる姿というのは、大学のゼミみたいに、子どもたちが自主的に深く取り組むというものだと思いますが、そういうところまで到達するには、子どもたちもある程度高い基礎学力をもっていて、そのうえで主体的に取り組もうというところがでてくるものと思います。先生方についても、ある程度、考える力を高める授業とはどういうものか理解していないと、本当の意味で、どこまで意識して実践しているのかわからないと思います。学調の結果と先生方の主観によるやっていますという結果と、乖離した場合は問題だと思います。この指標については、そういうところが心配というか、実情に即しているのかどうか果たしてこれで見えるのかなという疑問はあります。

●市長

私は、１つ目の目標は教育課題のことなのでよくわかりませんが、２つ目のこれからの時代に求められる資質・能力の育成については、思考力、英語教育、ＩＣＴの活用がありますが、思考力とあわせて必要なのは、人間としての多様性やチャレンジャブルな精神がどれだけあるかということではないかと思います。既存の調査にはないかもしれませんが、これからの時代に必要はことは、一般的にはそういうことだと思います。

●教育長

非認知能力というかたちで、今おっしゃったことはいわれています。多様性だとか、寛容性だとか、粘り強さとか。ただ、それをどう測るかということです。この指標は、漏れがないように項目をたくさん挙げて作っています。客観性をという点であれば、学力の向上は①だけでいいし、いじめ・不登校も④だけでいい。そうすればもっと内容は絞れますが、そのへんの議論です。確かに主観で答えるものについては、どこまでその回答に信ぴょう性があるのか、かなりばらつきがあると思います。テストの正答率と主体的な観点と、アンケートの精度からいうとずいぶん違ってくるものが全項目一緒に並んでいる、その点でまだ議論が必要だと思っています。市長がおっしゃるように、思考力以外の、多様性とか、粘り強さ、頑張る力とか含めるとすると、またアンケートの内容を検討する必要が出てくると思います。

●大谷委員

市長、大変申し訳ありませんが、所用によりここで退席させていただきます。

●市長

わかりました。大谷さん、ありがとうございました。

（大谷委員退席）

●教育長

先ほど申し上げた、インプット、アウトプット、アウトカムという点で言うと、この評価指標はアウトプットの部分です。小中一貫教育というインプットを行って、アウトプットとして、学力とかこういうところにこのような現れがあるだろう、その上に立って、進路希望の実現という次の一歩を踏み出すというのを最終的なアウトカムとしています。アウトプットの部分を、先ほどの草加市とかいろいろな市町の状況を見ながら、何を成果として市民に、まさに幼小中一貫教育をやってこういう成果が出ましたと説明することができるのか。先ほどの話のように、質問によって信ぴょう性に差があるため、

その内容を深めていきたいと思います。もう１点、何のために勉強するのかということ。勉強が嫌いな子に勉強させるのは難しい。そこで忘れていけない視点が、何のために勉強しなければならないのかということで、親も、市民全体で学力向上を進めていくときに、その合意もなければいけない。先日市役所内でリーサスの説明がありましたが、その中で、磐田・掛川・袋井管内では親が製造業に従事している方が圧倒的に多いという話がありました。私が予想するのは、確証はありませんが、今後20年たった時に一番就業人口の減少率が高いのは製造業ではないかと思っています。それを考えたときに、子どもたちはどういう世界で生きていくのだろうか、やはり、思考力、判断力、表現力といった部分の力、考える力をつけておかないと、工場での単純な作業の仕事が減っていくだろうという中で、今の学力の問題を考えていく。アウトカムのもっと先の話ですが、これは予想の話です。その辺を、市民の皆さんと、何のために勉強するかという合意を一緒にやっていく必要があると思います。

●市長

大事なことだと思います。施策をやっていくうえで、今の、産業経済懇話会でそういう議論をしていますとか表に出していきますから、産業経済と教育施策は一致する方向で見ていくということは、必要なことだと思います。

時間が迫ってまいりました。あと、ラグビーワールドカップが来年開催されますが、学校の皆さん方に協力をお願いします。例えば、子どものタグラグビーとか、そういったいろいろな面で協力いただくことがたくさん出てくると思います。本日の資料の中で、これは国際化に向けた取り組みの中でやってきている内容です。ラグビーそのものをエンジョイできるように、タグラグビーなどをやっています。

さて、以上でよろしいでしょうか。この会議は、次はいつですか。

●教育部長

本年度はこれで終わりです。また来年度お願いいたします。

●市長

本日の内容で、一貫教育の話も途上ですが、学力向上の話で、ここで話し合ったもののうち可能なものは予算要求する方向で調整をしてください。

それでは皆さん、本日はありがとうございました。